

Title	リカルドオの価値論 (三)
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.4 (1922. 4) ,p.471(39)- 499(67)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19220401-0039

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

せざるの故を以て標準貸率並に例外貸率に改正が加へられる場合に際しては、再び現實收益が最初の標準收益を超過するに至るまでは、最初の標準收益を標準として貸率に改正を加へることゝせられ (Sec. 59. (5)) 營業上に於ける唯一回の好成績の澤を永久に受くるが如きことなからしむるの政策を採つたのである。

リカルドオの價值論 (三)

小泉 信 三

(六)

貨物の價值はその生産に費やさるゝ労働量之を決すと謂ふも、種類を異にせる労働は單に其量のみを取りて、之を相互に比較すること能はず。例へば熟練ある打金匠一日の労働と、尋常力役夫一日の労働とが、その生産物の價值を等しうせざるべきは固より論なきを以て、今進んで、同量の労働の生産物は互に同價なりと謂はんと欲せば、豫め或種労働の一定量は、果して他種労働の幾許量に相當するやの換算標準を立てざるべからず。然るに Ricardo が論せんと欲するところは、貨物相對價値の變動の效果に關してその絶對價値變動の效果に關せざるを以て、彼れは深く之に觸るゝことなくして、此難關を通過することを得たるなり。即ち彼れはたゞ二物の交換比率を決するものは、生産に費やさるゝ労働量にして、一方の労働

量相對的に増加するときは、その生産物の價值騰貴し、減少するときは價值下落することを謂ふに止むるを以て、その取りて相比較するところは、常に同種労働の量の増減のみ。遂に異種労働を相互に比較するの必要に會せざるなり。例へば打金匠の労働は、之を織匠の労働と比較すること甚だ困難なりと雖も、一時期に於ける打金匠の労働と、別の時期に於ける打金匠の労働とは、之を相比較すること難事にあらず。此種の労働に要する特有の熟練と強度とは、時を距つるも略ぼ變ることなきを以てなり。「假に今日羅紗一片は麻布二片の價值ありとし、十年後に於て羅紗一片の普通價值は麻布四片なりとせば、それは羅紗を作るに要する労働の増加せるか、或は麻布を作るに要する労働の減少せるか、或は兩原因併びに作用せるかに因るものと論結して不可なかるべし」と (Ibid. p. 14)。而して是は人の一定時に於ける毛織物労働と、別の時に於ける毛織物労働との比較に依り、敢て毛織物労働と麻織労働との價值産出力を相互比較することを俟たずして論結し得るところたるなり。貨物の價值は之に費やされたる労働量之を決すと謂ふに當りて、Ricardoが謂ふところの労働は、常に直接一貨物の生産に費やされたる労働のみならず、

貨物生産上の用に供せらるゝ資本生産の爲めに費やされたる労働をも併せ含めり。謂へらく、Adam Smithが引ける原始社會の例に於ても、既に多少の資本は鳥獸を獵獲する爲に之を缺く可からず。從て此の如き社會に於ても、是等鳥獸の價值はその獵殺に必要な時と労働とのみならず、又併せて獵夫の資本、即ち頼りて以て獵獲を行ふべき武器の供給に必要な時と労働とに由りて左右せらる。「假に海狸はその捕獲困難にして、之を射撃する武器精巧なるを要する爲め、鹿を獲んが爲めに要する武器よりも労働を費やすこと多しとせば、海狸一頭は當然鹿二頭以上の價值あるべく、而して其理由は正に全體に於てその捕獲に要する労働多き一事に在り。」此理は原始社會に於けると、文明社會に於けるとに由りて異なることなく、貨物の價值は常に直接に之を作る労働の外、使用機械道具原料等に投せられたる労働合計に由りて決せられ、其何れかに於ける増減は、必ず生産物の他の貨物に對する價值を増減せしめずんば已まざるなり (Ibid. pp. 16-21)。而して此理はまた資本(機械道具原料等)の使用者が、其所有者と同一人なると否とに由りて異なることなく、又生産物が資本の所有者と、その使用者と、即ち資本家と労働者との間

に分配せらるゝ、比例如何は、生産物の價值に影響することなし。蓋し資本利潤又は賃銀率の高低は、各種産業に對して均等の作用を加ふるを以てなり (Ibid. p. 18)。以上述ぶる限りに於ては、Ricardoの説は、最も單純明瞭なる労働價值説と稱すべきものなり。

(七)

以上述ぶるところは、姑らく資本耐久性上の異同を無視しての論なり。今新たに此一事を取りて考慮に置くときは、Ricardoの説は當然面目を改めざること能はず。彼れは資本の消耗の速かなると否とに由りて流動資本と固定資本とを分てり。高價にして耐久力大なる建物機械を生産上に用ゐるものは、多額の固定資本を用うるものと稱せられ、之に反して、その資本の主として賃銀支拂の用に充てられ、從て衣食物の購入に費やさるゝものは、資本の大部分を流動資本として用ゑと稱せらる。故に二生産業に投せらるゝ資本は同額なるも、その固定部分と流動部分との占むる比例は同一ならざることあるべく、又二業に投せられたる固定資本と流動資本とは各々同額なるも、その固定資本の耐久力は同じからざる事あるべし。

既に斯の如き場合を想像すれば、上に述べたる價值學説には修正を要すること勿論なり。故に曰く、貨物の相對價值の、その生産上に要する労働の増減よりして起る變動の外、更に貨物は、また投せられたる固定資本の價值等しからざるか、又はその耐久力等しからざる場合には、賃銀の騰貴及びその結果たる利潤の下落より生ずる動搖を免れずと (Ibid. p. 23)。

例を以て此理を説明せんに、假に上記原始社會に於て、獵夫及び漁夫の各々生産上に用ゐる獵具漁具は、共に同一量労働の生産物にして、且つ共に等く十年の使用に堪るものとせば、獵夫一日の労働の産物たる鹿の價值は、正に漁夫一日の労働の産物たる魚の價值に等かるべく、魚と鳥獸との比較價值は、生産量の幾許なるか、及び一般賃銀又は利潤の高低如何に拘らず、一にその各自に體現せられたる労働の左右するところたるべし。利潤は賃銀の或は低く或は高きと互に比例して或は高く或は低きを以て、賃銀の高低は利潤の問題に取りては最も重要な事項たりと雖も、賃銀は兩生業に於て同時に等しく或は高く或は低きを以て、毫も魚獸の相對價值を動かすこと能はず。獵夫にして、その賃銀として割き與ふべき獵獲物の部分

増大せることを理由として、その生産物の、魚に對する價值の増加を求めんか、漁夫も亦同じ理由を以て之に對抗すべきを以てなり。魚獸の交換比率はたゞ之に費やさるゝ勞働量の増減に由りてのみ變動す。今假に一貨物、例へば金は、常に機械道具の援助なき、勞働の同一量に依て生産せられ、從てその價值不變なりとせば、魚獸の價值の變動は金に由て之を測定することを得べし (Ibid. pp. 2330)。然るに今獵夫と漁夫とが各々投下する固定資本は、共に等しく十年の使用に堪ふるも、その流動資本に對する比例を同じうせずして、例へば獵夫は百五十磅の固定資本と五十磅の流動資本とを、漁夫は之に反して五十磅の固定資本と百五十磅の流動資本とを用ゐ、而して利潤率は一割なりとせば、獵夫はその生産物を七十九磅八志(流動資本五十磅)に、之に對する一割の利潤を加ふるときは五十五磅、更に之に利率一割のとき現在價值百五十磅なる十年間年金額廿四・四磅を加ふるときは七十九・四磅となる(漁夫は之を百七十三磅二志七片(流動資本百五十磅)に、之に對する一割の利潤を加ふるときは百六十五磅、更に之に現在價值五十磅の十年間年金額八・二三磅を加ふるときは百七十三・一三磅となる)に賣らざるべからず。然るに今生産上に費

やさるゝ勞働量は依然同一なるも、賃銀は騰貴すること六割なりとせば、獵夫は舊と同數の人を雇傭する爲め僅かに三磅の資本増額を行ふことを要するに過ぎず。と雖も、漁夫はその三倍の増額を必要とすべく、資本利潤は下降して四歩となるべく、獵夫はその生産物を七十三磅十二志六片(流動資本五十三磅)に、之に對する四歩の利潤を加ふるときは五十五・一二磅、更に之に利率四歩なるとき現在價值百五十磅なる十年々金額十八・四九磅を加ふるときは七十三・六一磅(漁夫は之を百七十一磅十一志五片(流動資本百五十五磅)に對する四歩の利潤を加ふるときは百六十五・三六磅、更に之に利率四歩のとき現在價值五十磅の十年間年金額六・一六二磅を加ふるときは百七十一・五二三磅となる)に賣らざるべからず。即ち獸と魚との比價は前に 100:218 なりしもの、今は 100:233 たるべし。即ち一般に賃銀騰貴するときは、資本中流動資本重さを占むる産業の生産物は、資本中固定資本重を占むる産業の生産物に比して其相對價值騰貴すべきの理なり。(Ibid. pp. 31-33) Ricardo に從へば、固定資本はその消耗の速かなるに従ひ、其性質流動資本に近づくものにして、上述の理はまた固定資本と流動資本との比例は同一なるも、固定資

本の耐久力相等からざる場合にも適用せらる。即ちその生産上に固定資本の使用せらるゝものにおいてはその使用久しきに耐ふる程度に従ひ、その生産物の價格は、賃銀の騰貴、利潤の下落の爲めに下落すと謂ふなり。Ricardo自ら其所説を概括して曰く、或種の生産に充用せらるゝ固定資本の量と耐久性とに比例して、斯る資本を用ゐて生産せられたる貨物の相對價格は賃銀と反對に變動し、賃銀騰貴するときは下落するものゝ如し。また如何なる貨物も單に賃銀騰貴せるの故を以て絶對價格騰貴することなく、之に投せらるゝ労働の増加するにあらずんば斷じて騰貴することなきのみならず、その生産上固定資本の用ゐらるゝ一切の貨物は、賃銀の騰貴と共に常に騰貴せざるのみならず、却て絶對的に下降するものゝ如し。(pp. 41-2)

上記 Ricardo の説は凡べて貨幣の價值は不變なりとの假定に基づくものなり。然るに貨幣は一般貨物と同じく其價值に變動あることを免れず。而して貨幣價值の變動より生ずる賃銀の騰貴は、一般物價の騰貴と相伴ふものにして又其故に何等利潤に對して影響を及ぼすことなし。たゞ利潤を下降せしむるの作用あり

て、生産物の價值を騰貴せしむるの影響なきは、労働者に對する報酬の豊富となり、又は賃銀を以て購ふべき必需品獲得の困難より起る賃銀の騰貴是なり。(pp. 42-3) 是を千八百十七年に於ける彼れが價值論の主要とす。

(八)

Principles 第一版價值論の章を讀むものが注意を促がされざること能はざるは、Ricardo が賃銀の騰貴は必ず貨物の價格に傳へらるゝとの名聲ある學者間の通説に反對して、賃銀の騰貴は價格の下落と兩立し得べしとの「新奇」の説を主張する爲めに特に力を用ゐたること是なり (p. 38, 40)。而して彼れの説明を聽けば、固定資本と流動資本との比例を同じくせざるか、又は固定資本の耐久力を等しくせざるか、生産業に就ては、其生産物の交換比率は賃銀の騰貴即ち利潤の下降の爲めに變動すべきものにして、その變動は常に貨物にして生産に充用せらるゝ資本中固定資本を占むるか、或は固定資本の使用久しきに堪ふるものゝ比價は下落して、然らざるものゝ比價は騰貴するに在りと謂ふべく、若し金の生産にして固定資本を要するものならば、事實は然り、是よりも固定資本を要すること少なきか、又はその消

耗の速かなるものにありては、生産物の價格は賃銀騰貴の爲めに騰貴すべき理なるに拘らず、Ricardoが頗るその下落の一面を力説するに努めて、騰貴の一面を云はざりしは何故ぞ。Ricardo研究の一權威たる Jacob H. Hollander (The Development of Ricardo's Theory of Value, Quarterly Journal of Economics, Aug. 1904, pp. 455-491—David Ricardo, A Centenary Estimate, Johns Hopkins University Studies in Historical and Political Science Series XXVIII No. 4, 1910) は之を解釋して Principlesの第一章が單獨なる價值の説明たるよりも寧ろRicardoが之をその凡そ千八百十三年以來唱へ來れる實際政策上の主張に對する理論的根據たらしめんことを期したる事情に由るものとなせり。而してRicardoが唱へ來れる實際政策上の主張とは、彼れが(一)Malthusに反對して利潤下落の原因は究竟賃銀騰貴の外に之を覓むべからざることを固執し(二)McCullochが提議せる國債利子を穀物價格に應じて削減せんとするの案の正常衡平の策にあらざることを主張し(三)穀物輸入税の撤廢は一般物價の下落を來たすべしとの世間の憂懼に同するを肯んせざりし事是なるが(ibid. p. 464, p. 82)是等の主張を支持せんが爲めには、何れも賃銀(穀物)の騰貴が必しも價格を騰貴せしめざることを

證明するの必要あるなり。今就中吾人に取りて興味あるは、その利潤高低の原因に關する Malthusとの論争なり。

千八百十三年に於ける英國農業不安と、議會に於けるその論議とは Ricardoの注意を促がし、千八百十四年始以來 Malthusと穀物關稅の賃銀利潤地代價格に及ぼす影響に關して、頻りに說を戦はしたることは、その書簡集の示すところなり。(Letters to Malthus pp. 34-55) Ricardoの説は當初より穀物輸入の制限は、其價格の騰貴を來たし、食物價格の騰貴は賃銀を騰貴せしめ、賃銀の騰貴は利潤利子の下落と相伴ひ、而して「農業企業家の利潤は他の一切産業の利潤を支配す」と謂ふに在りき。Malthusは之に反して、農業企業家の利潤が他の一切産業の利潤を支配すと云ふは、その正反對よりも眞なることなく、從て食料獲得の方法を低廉ならしむることは、必しも利潤引上の唯一の途にあらず。即ち新外國市場の開拓は國內商品の價格を騰貴せしめ、特定産業の利潤を膨脹せしめ、結局農業上の利潤をも騰貴せしむとの說を以て之に對したり。既にして Ricardoはその Malthusに與へたる書簡(二八一四年六月廿六日付)に於て、經濟學上、穀物輸入に對する制限は輸入國に於て利潤を下降せ

しむるの傾向ありとの命題よりも更に予の確信せるものあることなし、食物生産の難易は資本利潤を左右する殆ど唯一の原因なり、同十月廿三日附と云ひ、千八百十五年に至りて *Essay on the Influence of a Low Price of Corn on the Profits of Stock* を著し、分配理論に基づきて、穀物自由輸入を主張し、Malthus の保護主義的結論はその一般自由貿易論と一致せざるものなる事を明にせんとしたり。然れども賃銀の騰貴は必然價格を騰貴せしむるものなるときは、賃銀の騰貴は利潤下落の唯一の原因たることを證明する事能はず。蓋し資本家は賃銀の騰貴の爲め失ふところを、生産物價格の騰貴に依て償ふことを得べければなり。故に其利潤論の正しきことを立證せんが爲めには Ricardo 先づ賃銀騰貴するも價格は必しも騰貴せざるの理を明にせざるべからず。然るに當年經濟學界に於ける有力學説を窺へば、此新見解は容れられ難きの觀あり。即ち Adam Smith の此點に關する所説は、大體に於て穀價の騰貴は賃銀並に他の一切貨物の價格を騰貴せしむる事を認むるに傾き (Wealth of Nations Bk. IV. ch. V.)、Malthus は夙に其人口論(第二版)に於て「特定國に於ける貨幣價格は勞働並に他の一切貨物の價格を左右する最有力なる成分なるこ

と疑を容れず」と謂ひ (p. 458. *Observations on the Effects of the Corn Laws*, p. 11) J. B. Say は「穀物價格にして増加せば、彼れは「企業主、農民、製造家又は商人は」同じ比例に於てその生産物の價格を増進せしむることを餘義なくせらる」と謂ひ (Traité d'économie politique 1803, tome 1, p. 294) Torrens は「穀物價格の騰貴は勞働の價格を騰貴せしめ、勞働の騰貴は勞働が直接生産するところの貨物並に勞働が之に對する等價物として用ゐらるゝ貨物の一切に傳へらる」と謂ひ (An Essay on the External Corn Trade, 1815, p. 88) 否な Ricardo 其人すら曾て穀價若しくは賃銀の騰貴は一切貨物の價值又は價值を騰貴せしむるものなるを言明したることあるなり (Letters to Malthus pp. 37, 39)。*ence of a Low Price of Corn on the Profit of Stock* の公刊より經濟學及び課税原理著に至るまでの Ricardo が苦心は専ら此點に存したり。此期間に於て彼れがその思索上に踏める行路の決して平坦ならざりしことは、千八百十六年十月 Malthus によるその經濟學原理著述の進行を報じて「予は價值及び價格の問題に關する舊意見のれりし爲めに、是等の問題の爲め甚しく妨げられたり。予が現在の見解も或はじく謬れるなきを保せず。蓋しそは予が豫想せる意見と異なる結論に導き至

らしむるを以てなり。予は、己れ一人を満足せしむるに過ぎざる迄も、我學說に一貫せる形態を附與するに至る迄研究を繼續すべし、(Letters to Malthus p. 120)。と謂へるに徴して之を知るべし。斯くして彼れは既述の如く、二貨物のその生産に投せらるゝ固定資本の同額なるか、或はその耐久力及び固定資本流動資本の比例を同じうする場合に於ては、生産上に費されたる總労働量その價值を決定して、賃銀の高下は全然之に影響を及ぼすことなきも、流動固定資本の比例一ならざるか、或は固定資本の耐久力等しからざる場合に於ては、固定資本の重きを占むるか、或はその耐久力一層大なるものにおいて、生産物の相對價值は實に賃銀騰貴の爲めに下落すとの結論に到達したり。Ricardoが曩にAdam Smithの費されたる労働を價值の尺度となす事を以て一貫せざりしの不徹底を難じたる(本誌前號七六一七頁)に拘らず、自らその當初の原則に修正を加へて憚るところなきは、Hollanderの解するところを以てすれば、此修正が正に彼れの第一に求むる、價值が賃銀騰落の爲めに騰落せざる事の證明を與ふるを以てなり。謂へらく價值論の章の結末、諸貨物は賃銀の眞騰貴の結果として、その價值を下降せしむること得べしと雖も、此原

因よりして之を騰貴せしむることを得ず。他方に於て諸貨物は、賃銀下落するときは、賃銀が與ふる生産上の特殊利益を失ふが爲め、其價值却て騰貴することあり、の一句には殆ど意氣揚々の響あることを聽くを得べしと(Hollander, p. 475, p. 90)。Ricardoが賃銀の騰落必しも貨物の價格を騰落せしめず、時として價格は賃銀騰貴の爲めに却て下落し、賃銀下落の爲めに騰貴することあるの理を證明する爲め頗る力を用ゐたるの跡は甚だ顯著なりと雖も、果してRicardoの意はHollanderの謂ふが如く、此證明を以てその實際政策上に固執し來れるを主張の理論的根據たらしめんとするにありしや否や。少くもその賃銀と利潤との關係に關する限りに於ては多少疑を容るべき餘地なきにあらず。Hollanderに従ふときはRicardoは利潤が賃銀の騰貴の爲めに下落することを云はんが爲めには、賃銀騰貴の爲めに價值騰貴することなきを要するを以て、此理を證明せんとして其價值論に苦心せりと云ふ。然れども價值が賃銀の變動に由て全く影響せらるゝことなき少數の場合に始らく措き、固定資本と流動資本との比例に異同あり、又は固定資本の耐久力一ならざる場合に於て、價值は賃銀騰貴の爲めに却て下落することありと云ふに

方つては、彼れは賃銀の騰貴は、當然利潤の下落を意味するものとして、之を其推理の前提に置けり。即ち Ricardo が賃銀騰貴の爲め、固定資本を要すること多か、或は固定資本の耐久力大なるものを用うる産業にありては、その生産物却て下落すと云ふの理は、二産業中比較的多くの流動資本を用ゐて生産を行ふものは、賃銀騰落の爲めに直接影響せらるゝところ多く、之に反して固定資本は放下の期間長きに互るものなるを以て、之を用うることも多きものは、利潤率の高下に依りて直接影響せらるゝところ多きものなるに、今利潤は正に賃銀の或は低く或は高きに比例して或は高く或は低かるべく、例へば賃銀百分六の騰貴は、利潤百分四の下落を來たすべきを以て (p. 32) 二貨物の比價は賃銀騰貴の爲めに變動し、その生産上流動資本重きを占めて、賃銀の影響を受くること比較的大なる貨物の價値は騰貴し、固定資本重きを占て利潤の影響を受くること大なるものは其價値下落すと謂ふに在ること前述の如くなるを以て、若し Ricardo の志が、利潤下落の原因は賃銀の騰貴に外ならざること證明せんが爲めの基礎を求むるに在りしとせば、彼れはその最後に求めんと欲する答を先づ前提として論を進めたるものと謂はざるべからず。

Ricardo は素より全然推論の規範を犯すことなしとは云ふべからずと雖も、また恬然斯の如き背論理を敢てする人なる事を信じ難し。Ricardo が價値學説の發達に關する Hollander の微密周到なる研究は後進を益する甚だ大なりと雖も、右記の一點に關する推斷に至ては、予の多少の留保を以て聽かんと欲するところなり。

(九)

Principles 第一版は千八百十七年の春公にせられたり。然るに此書に於て Ricardo は學界の通説に反する「新奇」の説なる事を自覺しつゝ、賃銀騰貴の却て價値を下降せしむる事あるの理を力説したるに拘らず、學者の批評は此點には加へられずして、抑も費やされたる勞働の以て價値の尺度たらしむるに適するや否やの點に加へられたり。批評家の最有力なる一人を Torrens とす。彼れはその "Strictures on Mr. Ricardo's Doctrine respecting Exchangeable Value" (Edinburgh Magazine and Literary Miscellany, October 1818) に於て、費やされたる勞働を以て有ゆる社會に於ける價値の尺度となすの失當なることを論じて謂へらく、Adam Smith が勞働量價値を測定すとの原理を、原始未開の社會に限れるは細心にして當を得たり。Ricardo は更に是より

も歩を進めて邪途に陥れり。寔に彼れは資本の耐久力等しからざる場合に、此原理の適用すべからざることば之を認めたりと雖も、Ricardoは此を以て例外の場合と爲せり。然るに是は例外にあらずして、却て通則なるを以て、彼の原則は全然是が爲めに覆へざる。又假に資本の耐久力は相等しきも、資本が動かす労働量は等しからざることあるべし。而かも猶ほ競争は生産物の價值を同一點に到達せしめずんば已ます。故に等額の資本が、等量の労働を動かすときは、同額の價值を生ずること勿論なりと雖も、此二個の條件の間には何等必然の關係なく、價值はその全然異なる場合にも相等しきことあるべし。故に交換價值を決定するものは労働量にあらず。Ricardoは「偶然の一致を必然の結合」と錯認せるものなりと。而してTorrensは其所説を概括して、資本を構成する原料と賃銀との比例等しからざるとき、一業に於ける賃銀率の偶々他に於けるよりも高きとき、資本の耐久力一ならざるとき、耐久力は等しきも支出賃銀額の同じからざるときは、生産物の價值は之に投せられたる労働量に比例せざるべし」と謂へるなり。(Letters to McCulloch p. 16)

Malthusも亦此點に於てはTorrensと見解を同じうするものなり。彼れは既に千

八百十七年九月 Principles 再讀の後、Ricardoに向つてその價值尺度の問題に就ては後者と説を異にすることを告げ、Ricardoも之に對して自家の價值學說の利潤率を異にする諸國に於て支持すべからざること容認したる(Letters to Malthus p. 139)。Malthusは更に後れて千八百二十年の早春 Principles of Political Economyを著すや、其の一全節第二章第四節を擧げて一貨物に費されたる労働の果して貨物交換價值の尺度たるに宜しきや否やの論に充てたり。謂へらく、一貨物の生産に費やされたる労働量は、之を單獨に取りて見れば(Positively applied)價值の尺度たりと謂ふこと能はず。蓋し一切の貨物等しく其生産上に要する労働量を増加せば、その交換價值は不變なるべきを以てなり。又之を相對的の義に解して、貨物の交換價值はその各自に費やされたる比較的労働量之を定むと云ふも、社會發達の階段にして此原則の之に適用せらるゝものあることなき事(§ 80)を以て Smith又は Ricardoが「彼の資本の蓄積と土地の占有とに並びに先だつ初期野蠻の社會に於ては、諸物の獲得に必要な労働量の比例は、その相互交換の規則たるべき唯一の事情なるに似たり」と云ふは當らず。社會發達の最初期に於ても、既に労働は生産費の唯一要素に

あらずして、収益の遲速、varying quickness of the returns なる新なる一要素は、全然勞働とは關係なく價值決定の一必要々素を形成す。文明社會に於て同じ原因の作用することは言を俟たず。Ricardoの勞働價格騰貴せば多數貨物の價格下落すべしとの説は當を得たり。若し其語法を自然にして、多額の固定資本投下せられたる爲め、之に對する利潤、生産費の主要部分をなせる諸貨物にありては、その價格は利潤下落の爲め下降すと云は、人を驚かすこと更に少なきを得たるならん。一般に貸銀騰貴して利潤下落するときは同一量の勞働を動かす爲めに充用せらるゝ資本の比例異なるに従ひ、費さる勞働量は同一なるも、或貨物の價格は騰貴し、或貨物の價格は下落し、極めて少數貨物の價格のみ依然不變なるべしと。(pp. 88-95) Malthusは更に此外(一)製造業に使用せらるゝ外國貨物の量(二)課税及び(三)地代の支拂が、投下勞働量の外に價格高下の原因たることを認め(pp. 95-101)結局「一貨物の生産上に費やされたる勞働量は、同時同處に於ける相對價值の正しき尺度にもあらず、又異なる諸國及び異なる時代に於ける……眞交換價值の尺度にもあらず」との斷定を下せり(pp. 107-8)。

(十)

吾人は茲に暫らく止まりて、Ricardoの所說中勞働價值説と稱すべき部分の根據を吟味するの要あり。貨物の價值はその生産上に費やされたる勞働量之を定むと謂ふは、證明を待たざる自明の公理にあらず。Ricardoは如何にして二貨物の之に投せられたる勞働量が定むる比率に於て、相交換せられざることなきを保し得るか。此間に對する解答は自然價格と市場價格との關係を論ずる Principles 第四章中に之を求むることを得べし。是に由るときは、市場に於ける需要供給の關係に由て決せらるゝ貨物現實の價格の、必しも常に投下勞働量に由て定めらるゝ其價值と一致せざること、Ricardo之を認むと雖も、久しき亘りて見るときは、貨物の市場價格は其交換價值より離るゝこと能はずして、究竟之に歸着せんとするの約束あることを説くものなり(Letters to Malthus pp. 1489)。而して貨物の市場價格をして久しく其價值の上下に逸脱すること能はざらしむるものは、資本の競争、從て其結果たる利潤率の平均是なり。「各人にして其の資本を、その欲するところに使用すること自由なる限り、彼れは當然資本の爲めに最有利なる用途を求むべし……」

此の投資者の比較的不利なる業務を去りて有利なる業務に就かんとする不斷の欲求は、凡ての利潤率を平均し、若しくは、之を當事者が見て以て、或者が特に享有し、若しくは享有するの觀ある利益を償ふに足るとなすが如き比例に定めんとするの強き傾向を有す。今一貨物の市場價格その自然價格以上に昇るときは、資本は他の比較的不利の業務より此の有利なる生産業に集中し來り、貨物の供給を増加せしめ、從つて價格を下落せしむべく、市價自然價格以下に降れば、反對の作用行はれて、究局此二者を一致せしめずんば己まざるべし。Ricardoに從へば、利潤率平均を得たるときは、即ち貨物の市場價格とその價值との一致せる時なり。故に曰く「されば、貨物の市場價格の、何時までも引續き大に其自然價格以上又は以下に留まることを妨ぐるものは、各資本家が懐ける、其基金(資本)を比較的不利の用途より有利なる用途に轉用せんとする欲求是れなり。貨物の交換價值を調節して、その生産に必要な賃銀と、資本をその能率の原狀に復せしむる爲めに要する他の一切の費用とを支辨したる後、殘餘の價值又は餘剰をして、各業に於て、投下せられたる資本に比例するが如くならしむるものは此競争に外ならず」と (pp. 87-88)。即ち

Ricardoの勞働價值説に若し證明ありと謂ふべくんば、それは利潤の平均を其基礎とする證明なりと云ふことを得べし。

然れども此證明は暗黙の間、同額の資本は必ず同量の勞働を代表すること(即ち同數の勞働者を雇備すること)を前提とす。斯る前提の下に於てせば、貨物の市場價格は假令一時其價值の上下に離隔することあるも、利潤率平均の作用に由て早晩必ず是に復歸すべきの理なること勿論なりと雖も、一度此前提を撤去して、同額の資本必しも同量の勞働を代表せざることを認むるときは、復た投下勞働量に由て定められたる貨物の自然價格が、究竟その時々々の市場價格の吸引中心たることを信すべき理由存せざるなり。假に例へば二人の同じく一萬磅の資本を投じて生産を行ふものありて、一人は其資本の大部分を機械に投じ、一人は之を勞働者の雇備に充て、賃銀として支出し、而して生産物は各々その投下勞働量に比例して賣らるゝものどせば、同じ一萬磅の資本に對して、一人が受くる收益は甚だ少なるべく、一人が受くる收益は是に比して甚だ大なるべきを當然とす。此に於て此利潤率の不平均を正さんが爲め、資本は彼の不利の生産業を去て此の有利の産業に

移り、供給の増減、従て一方の價格の騰貴、一方の下落に由り、利潤率の平均を得るに至つて始めてその流動止みたりとせば、その平均を得たる場合の二貨物の比價は、決して投下労働量に比例するものにあらざることを明白なり。故に資本中固定資本と流動資本との占むる比例が常に同一なることの假定せられざる限り、貨物の交換比率は投下労働量之を定むとの理法は、之を證明すること能はず。右に述べたる Torrens, Malthus の批評も亦畢竟此點を指摘するものと云ふことを得べし。

Ricardo は始めより此理を知らざりしにあらず。されば彼れは Torrens の批評に對しては少しく平なる能はず。その McCulloch に與へたる書簡中に「耐久力等しからざる資本の生産上に用ゐらるゝとき、價值の労働量のみによて左右せられざることは、予之を拙著の中に明記せり」と謂へるなり (p. 14)。然れども Torrens, Malthus 等の批評は Ricardo をして漸くにして費やされたる労働量價值を決定すとの斷定の制限すべく、利潤の價值に及ぼす影響の重要視すべきを覺らしめたるものゝ如し。千八百十九年に出でたる Principles 第二版に加へられたる訂正は殆ど云ふに足らざるものなりと雖も、猶ほ右述の事を念頭に置きて之を見るときは Ricardo の

思想の將に動かんとせる方向を是に由て察すること難からざるなり。即ち彼れは第一章を五小節に分ち、諸所の字句を改めたるの外、Torrens の批評に鑑みて (Letters to McCulloch, p. 14) 費やされたる労働の價值尺度たる原則に對する例外として、既に第一版に擧げたる (イ) 固定資本と流動資本との比例一ならざる場合 (ロ) 固定資本の耐久力等しからざる場合の外、更に新に (ハ) 流動資本の回轉し、若しくは其投資者の手に復歸する時期の甚だ異なることある事情を加へ、賃銀騰貴して利潤下落するときは、二貨物中其資本の回轉に比較的長時を要するものは其比價下落することを認め、明かに其労働價值説を叙ぶるに一段の慎重を加へたり。(Hollander, Ricardo, p. 106. Ashley が Principles 第一版を小節に區分することを第三版に始す) わりの記せるは誤解を招くの嫌あり。Economic Classics p. 1 note

Ricardo の思索の経過は、明かにその McCulloch 宛の書簡に依て之を窺ふべし。McCulloch は Ricardo を師匠とするものにして、曩に Torrens の Ricardo を評するや、直ちに同じ誌上 (Edinburgh Magazine) に之に答へて、Ricardo が所謂労働は、管に資本の蓄積せられたる後之に加へらるゝ労働を意味するのみならず、資本の蓄積其事に投せらるゝ労働をも含むものにして、資本は畢竟蓄積せられたる労働に外ならずと

て Ricardo を辯護し、Malthus の Principles 出でたるときも、直ちに起ちて辯護の文を “Scotsman” に掲げ、Ricardo は之を多したりと雖も (Letters to McCulloch p. 63) 彼れは此辯解を以て安んずること能はずして、既に生産に要する時間が之に要する労働量と相併んで貨物の價值を決定する原因なることを確認せるなり。即ち同じ書簡(二八二〇年五月二日附)に於て彼れは、此問題(價值の問題)に關して爲し得べき最善の考慮を盡したる後、予は貨物の相對價值の變動を來たし得る原因二あることを信ずるものなり。第一は貨物の生産に要する相對的労働量、第二は斯る労働の成果が市場に搬出せらるゝ迄に經過すべき相對的時間是なり。固定資本に屬する一切の問題は此の第二の規則の下に屬す……と謂へるなり。(p. 65) 約六週間の後 Ricardo は McCulloch の間に答へて、再び同じ問題を論ず。曰く、一切の價值ある貨物は労働の生産するところなり。蒸氣機關の製作に投せられたる労働が、高價なる家具の製作に投せられたる労働と量に於てもものを行はれたる時間に於ても共に同一なりとせば、蒸氣機關と家具とは同價值なるべし。一年の終りに於て家具師は其家具を一千磅を以て賣れり。蒸氣機關も亦一千磅の價值ありと雖も、賣ら

れずして、次年の資本として使用せらる。假に利潤一割なりとせば、労働量及び機關所有者が投ずるを要する(此點に於て彼れは家具師と同地位に在り)流動資本と關係なく、機關所有者は其年の終りに於て、其蒸氣機關を能率原狀に復せしめ、且つ固定資本として用ゐられたる資本一千磅の利潤として、其生産物に百磅を課せざるべからず。若し蒸氣機關に依て行はれたる作業の収益を收むるに二年を要すとせば、彼は第一年の利潤として百磅、第二年の利潤として百十磅を收めざるべからず。而して是は市場に搬出せられたる貨物に現に蓄積せられたる労働とは全然無關係の事なるなり。今假に高價なる一機械を用ゐ、而して予は二年間何等の収益を此機械より得ることなしとせば、二年の終りに於て、予の機械と予の生産物とを合したるものは、之が生産に投せられたる一切の労働と、並びに此期間何等の収益を擧げざる資本の蓄積利潤との價值なかるべからず。然るに同じ結果は予が流動資本のみを用ゐ、而して我貨物を二年間市場に出さざる場合にも生ずべし。二年の終りに於て貨物の價值は之に投せられたる一切の労働のみならず、併せて予の資本が斯く用ゐられたる期間の全蓄積利潤に相當すべし。されば嚴密に謂

ふときは、貨物に投せられたる労働の相對量が其相對價值を左右するは、労働の外是に投せらるゝものなく、而してその投せらるゝ時間の同一なる場合に限るものなり。時間一ならざる時も、之に投せらるゝ労働の相對量は依然その相對價值を左右する主要成素たるものなりと雖も、唯一の成素にはあらず。蓋し貨物の價值は労働に對して償ふの外併せて貨物の市場に出さるゝまで経過する時間を償はざるべからざるを以てなり。一般則に對する例外は、凡て此の時の規則の下に屬す。而して一貨物完成に要する時は多岐多様なるを以て、假令生産上常に同量の労働を要する貨物の求め難きの困難に克つことを得たりとするも、猶は一貨物を選択して之を一般的價值尺度となすこと困難なり。極端なる二個の場合、(一)貨物が資本の中介を俟たず、労働のみに由りて、而かも即時生産せらるゝ場合と、(二)貨物が多量の固定資本の産物にして労働を含有すること甚だ尠なく、且つその長時の猶豫を待て始めて生産せらるゝ場合と是なるべし。一般貨物に最もよく適合せるものは恐らく此二者の中間ならん。此間位の一方に位せる貨物は、労働價格の騰貴利潤の下落と共に其比價騰貴すべく、反對の側に位せるものは、同一原因より

して價值下落すべしと (p. 69-71)。而して價值尺度の問題の解決容易ならざることを嘆じたる後、若し予にして拙著の價值の章を新たに起稿すべしとせば、予は貨物の相對價值を支配する原因の一ならずして二なること、即ち該貨物を生産するに必要な労働の相對量及び資本が眠れる時間並に貨物が市場に搬出せらるゝ迄の利潤是なることを認むべしと謂へり (p. 71)。(未完)